

令和5年度

第17回 うるま市教育実践グランプリ

【推薦部門】



うるま市立勝連小学校

教諭 喜屋武 昌乃

教諭 石原 愛巳

幼児教育と小学校教育における教育の接続に関する功績

～就学時における学びの接続〔保幼小連携の取組〕の工夫～

令和5年度「うるま市教育実践グランプリ 推薦部門」応募用紙

令和5年度「教育実践グランプリ 推薦部門」に下記の者を推薦します。

うるま市立 勝連小学校
校長 新垣 桂校印

ふりがな 応募者氏名 (経験年数)	喜屋武 昌乃 経験年数(本務) 23年 石原 愛巳 経験年数(本務) 4年
所属学校	〒 904-2313 住所 うるま市勝連内間1173番地 学校名 うるま市立 勝連小学校 電話 098(978)2222 FAX 098(978)2253
推薦の根拠 (校長記載)	<p><活動内容></p> <p>幼児教育と小学校教育における教育の接続に関する功績 ～就学時における学びの接続〔保幼こ小連携の取組〕の工夫～</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 未就学児童の実態把握 ～「保幼こ小連携」を通して～ 2 学年統一した指導実践 ～指導方針や方法をそろえた教育実践～ 3 関係する方々と連携を図った取り組み <p><推薦の根拠></p> <p>本実践は、1学年担任の喜屋武昌乃教諭及び、石原愛巳教諭の両教諭が、幼児教育と小学校教育の学びをつなぎ、入学したての1年生が、小学校生活の中で、楽しくいきいきと学習やその他の教育活動に取り組めるようになることを目指し、「スタートカリキュラム」を工夫しながら教育活動を行ったものである。</p> <p>就学前の教育と小学校教育と違いから、戸惑いや不安を抱えての学校生活をスタートさせる子どもは多く、「小1プロブレム」と呼ばれ、多くの学校が抱える課題として挙げられる。その課題を解決すべく、両教諭は、「スタートカリキュラム作成」「教育活動や場づくりの工夫」「関係機関や職員との連携」など様々視点から、入学時の子どもの学びについて、実態を踏まえ、工夫しながら協働体制で指導実践を工夫している。</p> <p>就学前と小学校の学びのつながぎを大事にし、一人ひとりに寄り添い、関わり合いながら、段階的に指導を継続することで大きな成果を生み出していることは、本教育実践グランプリの推薦部門に応募資格に値すると考える。</p> <p>また、本実践は、近隣のこども園や保育園との連携づくりとしても大きな成果があり、保幼こ小連携を充実することができた点からも、高く評価できる実践であると考えます。</p> <p>以上のことから、本実践の大きな功績を「足あと」として明記することで、本校職員のみならず、本市の各学校の保幼こ小連携の取組みの模範として、本実践を参考にして頂きたいと考え、令和5年度「教育実践グランプリ 推薦部門」へ推薦する。</p>

教師の活動の概要

<教師の活動と成果>

幼児教育と小学校教育における教育の接続に関する功績
～就学時における学びの接続〔保幼小連携の取組〕の工夫～

Ⅰ 未就学児童の実態把握 ～「保幼小連携」を通して～

(1) 保幼小連絡会の開催

本校では、近隣幼稚園、保育園、子ども園職員を招き、年3回、「保幼小連絡会（以下、連絡会）」を開催している。連絡会では、各園の教育方針や力を入れて育成に取り組んでいること、育てたい能力等の情報を共有するとともに、小学校入学時の学習活動の様子や「入学までに育てて欲しい力」について情報提供し、次年度就学予定の子どもたちの学びの接続が円滑に行われる様努めている。また、入学予定の園児の様子についての情報交換を行い、受け入れ体制の準備につなげている。

連絡会開催の成果として、①入学前の園児の様子を把握することで、小学校入学スタート時より、個に応じた指導の充実が図られたこと、②各園と小学校の教育方針や教育活動についての情報交換を通して、「学びの接続」が系統的かつ継続的に行われることにつながり、特に、スタートカリキュラム作成の基礎情報として有用となったこと、③小学校と各園との職員のつながりができることで、1年生と園児との交流の場を設定する等の連携した活動につながった（後述の「(2)子ども園との交流会の実施」参照）、等が挙げられる。

両教諭は、1学年主任の喜屋武昌乃教諭を中心に、連絡会開催の計画を立て、協力して各園との情報交換及び連携した活動づくりに取り組み、保幼小連携強化を目指し尽力した。

【保幼小連絡会の開催スケジュール】

令和4年度	*	令和4年8月22日（月）	第1回保幼小連絡会
	*	令和5年2月22日（水）	第2回保幼小連絡会
	*	令和5年3月23日（木）、27日（月）	第3回保幼小連絡会〔引継ぎ〕
令和5年度	*	令和5年8月 4日（月）	第1回保幼小連絡会〔子ども園保育参観にて〕
	*	令和6年2月21日（水）	第2回保幼小連絡会（予定）
	*	令和6年3月21日（木）	第3回保幼小連絡会（予定）

(2) 未就学園児との交流の実施

保幼小連携した取り組みとして、未就学園児との交流が挙げられる。本校では、近隣の園との連絡会でのつながりを生かし、教育活動へとつなげている。これまでの交流は、未就学園児を招いて、小学校の紹介をしたり、つくった手づくりおもちゃで一緒に遊んだりしている。就学前の園児と小学生を交流させることで、以下に示す「子どもの姿」を引き出すことにつながっている。

【就学前の園児】

- 「しょうがっこうはたのしいな。じぶんもいつてみたい」
- 「はやく1年生のおにいちゃん、おねえちゃんになりたいな」

上記のつぶやきの中から、小学校生活に楽しみを感じたり、1年生に憧れを持ち、入学することに期待感を募らせたりする等、未知の不安を解消することにつながった。

【1年生児童】

- 「こどもえんのかたちが、たのしんでくれてよかった。」
- 「おにいちゃん（おねえちゃん）ってよばれてうれしかった。」

子どもの感想から、1年生にとっても上級生としての自覚や責任感の芽生えを引き出すことができた。

【保幼小連絡会の開催スケジュール】

令和4年度	*	令和5年2月22日（水）	お招き会〔子ども園、他園の園児〕
令和5年度	*	令和5年〔学期1回〕	音楽専科によるお楽しみミュージック〔子ども園にて〕
	*	令和5年〔夏休み〕	図書館司書による読み聞かせ〔子ども園にて〕
	*	令和5年12月13日（水）	2学年との交流会
	*	令和6年 1月	5学年児童による読み聞かせ（こども園にて）：予定
	*	令和6年 2月	児童会役員によるあいさつ運動・園庭清掃（こども園にて）：予定
	*	令和6年 2月	お招き会〔子ども園、他園の園児〕：予定

2 学年統一した指導実践 ～指導方針や方法をそろえた教育実践～

入学当初の1年生は、就学前の生活環境や学びの環境との違いから、小学校での学習活動に馴染めない、戸惑いや不安を抱えるなど、適応するまでの時間を要する傾向がある。そのため、小学校生活スタート時のカリキュラムを工夫し、安心して学校生活を送れるようにしていくことが必要となる。

本実践は、1学年担任の両教諭が教育実践や各活動への取り組みについて、工夫された計画に基づき、綿密に連携しながら協働して、共通理解を図り実践したものである。以下に、学年で統一した指導実践の取組を紹介する。

(1) スタートカリキュラムの作成

入学した1年生にとって、学校生活スタートから徐々に学校生活に馴染ませ、落ち着いて学習活動に取り組ませていくには、子どもの実態に合わせたカリキュラムの工夫を行い、段階的に学習活動へ入っていく等の配慮が必要不可欠である。

本実践では、入学してきた子どもたちの実態から、楽しく学びをスタートさせられるよう配慮し、指導計画を綿密に練り「スタートカリキュラム(図1)」の作成を行っている。そのカリキュラムをもとに、学年会等で指導実践や諸活動についての共通理解が図られ、学年で統一された指導につながっている。

また、週ごと(4週分)のカリキュラムを作成(学習予定表:図2)することで、学校生活へ段階的に慣れていくような流れを作るとともに、家庭との連携を図ることで、子どもの心理的安心を引き出すことにもつながっている。

さらに、本カリキュラムは、上級生や他職員とのかかわりを通じた活動も盛り込まれており、学校全体で入学児童への支援体制構築の効果も生み出している。

本校のスタートカリキュラムは、入学当初の子どもの実態に基づき、就学前の学びを小学校の学びへと接続し、子どもたちが安心して学習活動へ向かうことのできる基盤となり、登校しづりや学習への不適応を起こす子どもの発生を減少させることへとつながっており、「小一プロブレム」の解消に大きな成果があったととらえられる。

以下に、カリキュラムの工夫点を示す。

① あそびコーナー、あそびタイムの設定

○朝、登校してから、ランドセルを片付け後は、学年広場や教室での「あそびタイム」を設定し、楽しく活動を行

時間	10日(月)	11日(火)	12日(水)	13日(木)	14日(金)
8:00	登校したら、提出物を出し、学習の準備を整えてランドセルを片付ける。				
8:15	朝の活動(なかよし広場の掃き掃除)・準備運動(なつら、跳び箱、けりこ、輪投げ、お楽しみ遊びなどをする)。				
8:40	1時間観察(10分程度)→授業(残り45分) 仮かまじょう				
9:00	入学式	入学式	入学式	入学式	入学式
9:30	入学式	入学式	入学式	入学式	入学式
10:00	入学式	入学式	入学式	入学式	入学式
10:30	入学式	入学式	入学式	入学式	入学式
11:00	入学式	入学式	入学式	入学式	入学式
11:30	入学式	入学式	入学式	入学式	入学式
12:15	入学式	入学式	入学式	入学式	入学式

教師の活動の概要

【図1】スタートカリキュラム

月日	4月10日	4月11日	4月12日	4月13日	4月14日
曜日	月	火	水	木	金
行事	入学式				
4時～5時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
5時～6時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
6時～7時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
7時～8時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
8時～9時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
9時～10時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
10時～11時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
11時～12時	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム
下校	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム	あそびタイム

【図2】学習予定表

ったり、友達との関わりが持てるようにしたりすることで、心理的安心につながる環境づくりに配慮した。

- 「遊びタイム」での活動を充実させるために、折り紙、こま、けん玉、積み木、段ボールあそび、ぬりえ、絵本等のコーナー設置を行った。そのことで、子ども一人一人の興味関心に合わせた活動につなげられ、楽しく活動する姿を引き出すことができた。

② 「なかよしタイム」の設定

- 各園で行ってきた、手遊び、歌、ダンス、ゲーム等の遊びや活動を「なかよしタイム」として設定し、スタートカリキュラムに取り入れ、「自分にもできる」「小学校でもできる」といった自己肯定感を味わわせるように努め、学習活動に向かう際の心理的安心感を高めるようにした。特に、朝の活動時には、楽しい気持ちで一日がスタートできるように、楽しい活動から始められるように配慮した。

③ 教科指導の工夫

- 学年間での教材研究をもとに、国語や算数を中心に、教科指導の中で、音読や数などについて「あそび」を取り入れ、反復指導を繰り返し行い、教科学習へと発展的につなげるように工夫した。
- また、学習活動の中で、校長、教頭、支援員、音楽専科、図書館司書、養護教諭等、様々な先生方との関わりの方を設け、かかわりを持たせることを通して、安心して学校生活を送れるように工夫した。

④ 弾力的な時間割の運用

- 子どもの活動に変化をつけ、興味関心を高め、持続させるために、弾力的な時間割の運用を行った。単位時間(45分)にとらわれず、15分程度の短い時間を活用したり、2単位時間連続の学習(造形遊びや生活科等)を、一日の学習活動の流れや子どもの活動の様子や活動内容等に応じて、弾力的に学習活動を設定したりした。

(2) 環境づくりの工夫

新一年生が学校生活に馴染み、落ち着いて学習活動に取り組めるようになるには、安心して過ごせる「環境づくり」を整えていくことも必要不可欠であると考える。

本実践では、両教諭が、教室環境はもとより、学年スペースを有効に活用したり、掲示などの工夫を行ったりすることで、新1年生でも理解しやすく、落ち着いた生活ができるような働きかけの工夫も行っている。下記に主な取組の内容を示す。

① 温かい雰囲気づくり

- 教室に設置されている畳間に、ぬいぐるみ、絵本、積み木など、「遊び」を通して学べる素材を準備し、自由に触れられる環境を整えた。そのことで、休み時間や自由な時間には、友達と笑顔で楽しむ姿が見られた【図3】。また、模範となる言動について記録を残し、価値づけを行った【図4】。

- 体育などの屋外での活動の後には、クールダウンタイムとして、落ち着く音楽を流したり、活動時には楽しい雰囲気の音楽を流したりするなど、活動や情緒に合わせた音楽の活用も行った。また、時間を意識づけるために、片付けの時間、活動終了時刻等に、決まった音楽を流し時間を意識づけた。



【図3 畳間での活動の様子】



【図4 視覚に訴える価値づけの掲示】

② 絵や写真を取り入れた表示

- 新1年生にとって、自分の持ち物の片づけ場所や片付けの方法、提出物などの置き場所など、わからなくて困る場合がある。そこで、ロッカーには「ランドセルの片付け方」、教室前面には「道具のしまい方」、提出コーナーには、提出表示など、教室内に分かりやすく張り出して、子どもの困り感の解消に努めた。さらに、道具箱の中は、片付けしやすいように使うものだけを入れるなどのやくそくも設定し、実践させた。
- また、みんなで使うもの（清掃用具、ぞうきん、ロッカー、道具箱等）の片付けの仕方をわかりやすく示す工夫も行った。清掃用具やぞうきんは、使ったところに戻せるよう番号をつけたり、色わけしたりし、子どもたちが自分で片付けできるような工夫を行った【図5】。そして、掲示した写真のように片付けができた際には、価値づけをおこない、習慣づくように心がけた。



【図5 清掃用具の片づけ方】

③ 活動の見直し、ふりかえりを可視化する掲示物

- 教室に1年間のカレンダー【図6】を掲示し、これからどのような活動や行事があるのか、子ども自身が認知し、見直しを持ち実践に生かせるように工夫している。
- また、カレンダーに行事や楽しかった活動を書き入れていくことで、ふりかえりや成長の足跡が見えるようにした。さらに、子どもの価値のある言動やうれしい出来事等をカードに記入して貼り付け、クラスの子どものよさについて価値づけしたことを可視化もしている。子どものよさを写真とボイスシャワーで紹介した掲示を行うことで、子どもたちに自信を持たせるとともに、「自己肯定感」を高めることへもつながっていると考える。



【図6 カレンダーの掲示】

④ 共有スペース(学年広場)の有効活用

- 学年の子どもたちが、クラスの枠にとらわれず、自由なかかわりが持てるようにする工夫として、共有で活動できるオープンスペース(学年広場)を有効に活用した。その例として、子ども同士のかかわりが作りやすいよう、学年広場に、小グループ座席(児童用机)、座卓、あそびコーナー、読書コーナー等を設置し、場を工夫【図7】した。
- 休み時間や自由時間になると、子どもたちが学年広場に集まり、お友達と本を読んだり、学習活動に取り組んだり、折り紙などの活動を行うなど、思い思いに活動を行う姿が見られる。学年広場を有効に活用することで、様々なお友達との交流を通して活動を楽しむことへとつながっている。



【図7 共有スペースにおける環境づくりの工夫】

⑤ 学級編成の工夫

- 入学時、お友達がない集団に所属することは、1年生にとって大きな不安を抱える要因となる。そこで、学級編成時の工夫として、以下の配慮を行った。

○まず、仲のよい同じ園の子同士を把握したり、就学前の園のお友達~~が~~いない場合には、家が近所の子や知っている子の名前等の情報を園の保育士から情報収集したりして、配慮した形で学級編成を工夫した。

○また、入学前に「おまねき会」への参加を呼びかけ、他園の子どもたちと関わりをもたせるよう工夫するとともに、おまねき会の様子を考慮し、編成につなげた。そのことで、入学した後、「あの子、見たことある。」「前に話したとがある。」と話す子どもがいて、入学後の緊張を和らげたり、不安を解消したりすることにつながったと考える。

この環境づくりの実践は、両教師が、①子どもの目線を意識して掲示する、②かかわりを大切にする、③子どものよさを価値づける、④見通しと振り返りを可視化する、⑤子どもの「分かる化」を引き出す、等の環境づくりの視点を持ち、共通認識のもと、学年でそろえるべき掲示物を統一し、子どもの姿に即して創意工夫し、実践を積み重ねていった賜物であると評価できる。

(3) 学年で揃えた教育実践

スタートカリキュラムを実践する際に大切なことは、学級間の差がなく、学年で統一した指導展開を図ることが挙げられる。本実践において、両教諭は、学級間の枠に縛られず、学年合同で実施する教育活動を展開したり、指導方法を統一して実践に当たったりするなど、学年で共通認識のもと教育実践に臨んでいる。さらに、特筆すべきことは、両教諭とも、個々の児童の様子を見とり、じっくり話を聞いて、時にはじっと待ったり、時には、一緒に学習を進めたり、時には、個別に学習指導に当たったり等、効果的なかかわり方で、児童が落ち着いて学校生活へ向かう姿勢を整えるための働きかけを工夫しながら教育実践に当たっていることである。

この様な実践は、全ての学年での指導における基盤として大変有益であり、本校全教師への学習指導、生徒指導などの指導技術の向上に大きな示唆をもたらしてくれている。その実践内容を以下に紹介する。

① 合同授業の実施

○スタートカリキュラム実施時はもとより、年間においても学年合同の授業を積極的に取り入れて行っている。具体的な実践例を以下に示す。

○国語の時間や人権の日や平和旬間など、機会の折を見つけ、絵本の読み聞かせを実施している【図8】。

○学年合同の「お楽しみ給食」の時間を設定し、他学級の友達と一緒に、交流しながらランチタイムを楽しんだ【図9】。その際、場の工夫として、教室、学年広場に小グループの座席を配置したり、座卓を用意したりして、普段と変わった環境にすることで子どもたちの笑顔を引き出している。

○国語や算数などの導入時には、学年TTを組み、合同授業も行っている。そのことで、指導の格差を解消している。



【図8 絵本の読み聞かせ】



【図9 お楽しみ給食の様子】

② 登校しぶり、緊張の強い子への対応

○入学したての1年生の中には、新しい環境に馴染むのに時間を要する子どももいる。学級に入れない、落ち着かないなど、緊張しており活動に取り組めないなど、支援の必要な児童に対し、個に応じたきめ細やかな対応が求められる。そこで、困り感のみられる子どもたちへの対応として、対応の視点について学年共通理解のもと、以下の

指導実践を行った。

- まず、通っていた園での対応の仕方について、連絡会の際に情報として得ておくことに努めた。そして、その対応を参考にし、困り感を抱える子への対応を工夫しながら対応に当たった。また、活動を強いることなく、「待つ」の姿勢で様子を見守ることを実践するとともに、体調不良を訴える子や、顔色、表情に気を配り、すぐに対応するように努めた。さらに、教師からの優しい声かけや子ども同士でかかわりを持たせ、友達から声をかけてもらうような働きかけも行った。
- この様に配慮することで、困り感のある子が、次第に学校生活に馴染んでいき、友達と一緒に活動できるようになってきている。

③ 視点を持った指導

- 1年生のスタート時の指導では、次のような段階的な指導が必要だと考える。第一段階として、心理的安心を生み出す、第二段階として、子どもが「できる」と思えるような活動を仕組むのである。そのために、子どもの状態に合わせて、段階的な視点を持って指導に当たった。
- 第一段階の「心理的安心」を生み出す工夫として、毎朝、担任が「笑顔で迎える」を共通実践した。その際、子どもの表情などにも気を配り、優しく声かけを行っている。また、普段の子どもの活動に注視し、生活の中で、いい言動や、いい表情などを見つけた際には、さりげなく褒め、価値づけることに心がけた。
- 第二段階の「できる」と思える活動づくりの工夫としては、子どもの声を生かした指導の展開を図ったことである。子どもに「園ではどうしてた?」「どんなことをした?」などの問いかけを多く活用し、子どもの思いや声、意見を積極的に取り入れた授業展開に心がけている。さらに、その発言のよさを「ほめる」ことで価値づけ、子どもに「自分もできる」という気持ちを引き出すように工夫して指導に当たった。また、学習課題の提示の際には、説明を丁寧に行い、順序に気を付け、1~2の指示にとどめることを意識して実践した。
- この様な、個々の実態に応じて、段階を意識した働きかけを行うことで、子どもの安心を引き出しやる気を高め、学校生活を楽しく過ごせるようになってきた子どもが増えている。

④ 子ども主体のルールづくり【ルールづくりの工夫】

- 学校生活の中で、自分たちが楽しく、仲良く過ごしていくための「ルールづくり」も子どもたちと共に行った。学年広場での約束、トイレのスリッパの並べ方、おもちゃの使い方や片付け方等について、教師が一方向的に示すのではなく、子どもたちと話し合い子どもたちの声をひろってルールを決めていった。
- そして、決めたルールは、すぐに掲示し【図10】、意識化を図るようにした。そのことで、子どもたち自ら決めたルールとして、自分事でとらえ、ルールを守って行動しようとする意識が芽生えてきている。

本実践での、学年で揃えた教育実践は、他学年でも十分に活用でき、模範となる実践である。学年が共通認識のもと、教育実践に当たることは、1学年全ての子どもが、同じ教育を享受できる点で価値のある実践であると評価できる。その結果として、同学年の教師が担任する児童のみならず、全ての児童に対して積極的な指導を行うこと

につながるとともに、子どもにも学校への安心感を高めることにもつながっているなどの成果も得られる有益な実践だと考える。



【図10 ルールの掲示】

3 関係する方々と連携を図った取り組み

本実践は、スタートカリキュラムに基づき、各関係する職員や他学年と交流を通して、様々な方々と交流することによって、新1年生が、「学校は楽しい」「安心できる」という気持ちを引き出すことにもつながっている。ここでは、両教師と学校職員（管理職や学習支援員、他学年担任教師など）と綿密な連携を通して、教育実践への共通理解を図り、取り組んだ内容を紹介する。

(1) 支援員の活用

本校には、学力向上支援員、特別教育支援員、青少年支援員などの職員が配置されている。その支援員を効果的に活用し、子どもたちの教育活動に対して協力を得ている。その事例を以下に紹介する。

【学力向上支援員】

学力向上支援員の新垣聡子先生と連携して、算数を中心に学習指導を行っている。聡子先生の専門的な知見を生かし、担任にとっても「学び」となる実践となり、指導力の向上にもつながっている。

子どもたちは、聡子先生との学習を楽しみにしており、算数の学習活動に意欲的に参加する姿が見て取れる。また、スタートカリキュラムの実施時期には、カリキュラムの作成から環境づくりなどについて、助言をもらいながら進めてきた。聡子先生の協力を得ることで、「子どもに学びの楽しさを与えることができた。」「効果的な指導の在り方が明確になった。」等の教育効果が得られた。

【特別教育支援員/青少年支援員】

特別教育支援員の照屋明美先生、青少年支援員の中山妙子先生と連携し、困り感を抱える子や行動面、情緒面で配慮が必要な子に対する支援を行ってもらっている。先生方の専門的な知見を生かし、子どもの抱える困り感の原因の検討についてのアドバイスをもらったり、対応の仕方について示唆して頂いたりするなど、個に応じた指導の充実につながっている。また、絵本の読み聞かせなどに活用し、子どもにとって身近に感じ、安心してかかわれる職員としての存在価値を高めた。子どもたちは、先生方の読み聞かせにも、楽しそうに参加し、一生懸命聞いている様子が見られた【図11】。



【図11】支援員の先生方による絵本の読み聞かせ

(2) 学校職員の活用

学校には、管理職をはじめ、多くの職員がいる。その先生方とも連携を図り、子どもたちの学習活動へ参加してもらった。校長、教頭、養護教諭、音楽専科、言語学級担任、特別支援学級担任などの様々な先生方と連携を図り、積極的に授業へ参加して頂いた【図12】。

指導へ参画して頂いた先生方は、その専門性、特技、経験などから子どもたちへかかわり、その度に、わくわくして活動へ取り組む子どもの姿が見られた。さらに、様々な先生方からの価値づけ、称賛し、励ましなどを通して、子どもたちも学校への安心感を高めることのできた実践であると捉えている。



【図12】教頭先生による授業の1コマ

教師の活動の概要

(3) 他学年との交流を通じた活動

新1年生にとって、学校にいるお兄ちゃん、お姉ちゃんとかかわることは、とても楽しく有意義なものとなる。6年生を中心に、上級生との交流を通じた活動も、カリキュラムの中に組み込み、積極的にかかわりの場を設定している。

4月スタート時は、6年生に給食、清掃などの活動では、1年生の補佐(お世話)の協力を得て活動を進めている【図13】。この活動



【図13 6年生による1年生へのサポート活動】

活動をきっかけに、年間を通じて、6年生が積極的に1年生の教室まで足を運び、一緒に遊んだり、お世話したりする姿がある。特に、休み時間には、6年生が広場で1年生の遊びの様子を見守ったり、絵本の読み聞かせを行ったりする等の教育効果も生まれている。

その他にも、6年生以外の上級生との交流にも積極的に取り組んだ。その交流をきっかけに、他学年担任との連携・協力を充実させ、1年生に関する児童理解についての共通理解を進めることにもつながっている。

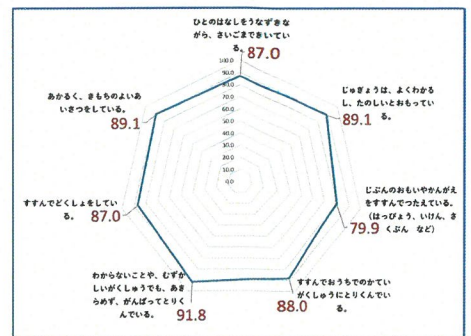
(4) 保護者との共通理解を図る

新1年が学校生活へ馴染み、適応していくには、保護者の協力も必要不可欠である。そこで、保護者との共通理解を図ることを目指し、学年だより、連絡帳の活用、電話連絡での情報交換など、家庭との連携する手段を積極的に活用し、情報共有を行った。保護者の協力を得ながら、子どもの日々の様子について理解を深めることに努めることで、子ども一人ひとりの実態即して、学校生活の中で適切にかかわり、支援することにつながったと考える。

4 まとめ

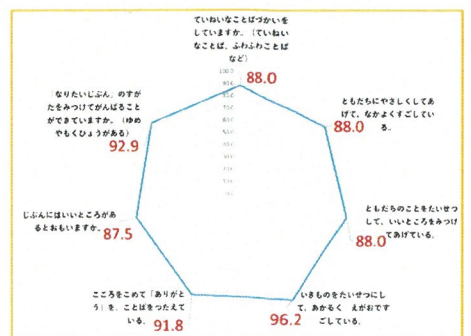
本実践をまとめるにあたり、1年生の本校で実施している学校教育目標具現化に向けた生活のふりかえりアンケート(11月評価)の結果から、本実践の成果を挙げてみたい。

まず、「よく考える子」(学習面)の育成指標の結果からは、どの項目も9割近い評価がされており、楽しく学習に向かい、意欲的に取り組んでいることが伺える。【図14】



【図14 学習面の指標】

また、「礼儀正しい子」(徳育面)の育成評価の結果からも同様、9割近い結果が出ている。そのことから、仲間となかよく活動したり、思いやりのある言葉かけ(ふわふわ言葉)を積極的に使おうとしている意欲が考察でき、支持的な風土の醸成が図られてきていることが読みとれる。この結果は、子どもの「安心」を引き出す環境が充実していると評価できる。【図15】



【図15 徳育面の指標】

さらに、「粘り強い子」(自立性)の育成評価の結果についても、上記2つの指標と同様、全ての項目において9割近い結果となっている。その結果から、1年生なりに、よりよい自分の姿を目指し、主体的に活動に取り組もうとする態度が育ってきていると考察できる。

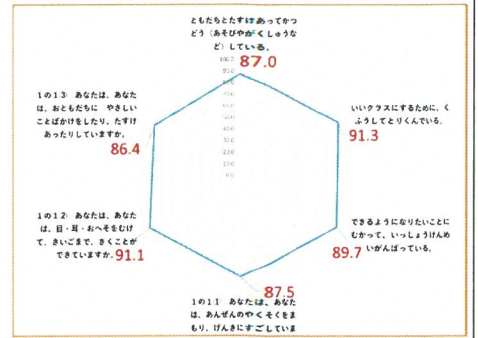
特に、「いいクラスにするために工夫してとりくんでいる」の回答は91.3ポイントで高く、集団意識の芽生えとともに、仲間と協働した活動が充実してきていると考える。【図16】

以上のように、本実践は、喜屋武昌乃、石原愛巳両教諭が、本校に入学してきた新1年生の学校生活の適応に至るまでのきめ細やかな取り組みや、学習活動へ意欲をもって参加する子どもの

姿を引き出す指導の在り方については、本校の教育活動の発展や職場の同僚教員の資質能力の向上、さらには、人間関係づくりに至るまで、数多くの模範となる功績を残し、多大なよりよい影響をもたらしてくれた。このことは、本校職員のみならず、本市の各学校の教員の模範として、本実践を参考にしてもらえるものだと確信している。

ぜひ、本実践の成果を評価して頂き、本市の教育実践の充実へとつながる一策として、各学校へ実践を共有して頂けるよう切に願いたい。

～ どうか、ご高配を賜りますよう、お願いいたします。～



【図16 自立性の指標】